

学校名	小城市立岩松小学校	達成度（評価） A：十分達成できている B：おおむね達成できている C：やや不十分である D：不十分である
-----	-----------	---

1 前年度 評価結果の概要	・「問い」を中心とした、主体的・対話的な深い学びの実践に向けて、校内研を中心に取組を進めた。教師や子どもの意識の変化は見られたが、学力の向上には至っていない。次年度、今年度の反省を踏まえた上で、授業改善やAI型教材を活用した基礎・基本の定着等さらに取組を進め、学力の向上を推進していく。 ・特別支援学級の児童だけではなく、困り感をもつ全ての児童に支援を行うため、本校では副担任制をとっている。複数の教員で関わることで、児童の困り感に寄り添うことができている。しかし、職員数の減少に伴い、これまでの体制を維持することが難しくなっている。次年度は、低・中・高学年団を中心に体制を作ることで、児童の困り感に寄り添っていく。 ・今年度達成度がやや不十分であった規則正しい生活習慣の確立に向け、家庭との連携という課題の克服に努めていく。家庭を巻き込んだ取組について担当者を中心に全職員で考えながら、さらに継続・発展していきたい。
------------------	---

2 学校教育目標	「自律」・「尊重」・「挑戦」を大切にしたい学校 ～個人と社会のwell-beingを目指して～
----------	--

3 本年度の重点目標	・「問い」を軸にした主体的・対話的で深い学びをめざし、校内研究や授業改善、AI型教材の活用を通して学力の向上を図る。 ・低中高学年チーム担任制による協働体制のもと、困り感をもつすべての児童に寄り添った支援を継続・充実させるとともに教職員の資質向上を図る。 ・家庭との連携を強化し、規則正しい生活習慣の定着に向けた継続的な取組を全職員で推進する。
------------	--

4 重点取組内容・成果指標	5 最終評価
---------------	--------

(1) 共通評価項目		重点取組		最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
● 学力の向上	○基礎・基本の定着と思考力・判断力・表現力を高める授業の実践 ○「めあて」から子どもの主体的な学びを促す「問い」を生む指導を行う。 ○自己選択による主体的な家庭学習の実践	○児童アンケートにおいて、「問い」「問題」が何かをとらえ、授業に取り組んでいる。」と答える児童を90%以上にする。 ○児童アンケートにおいて、「見通しを自分なりをもって問題に取り組むことができる」と答える児童を90%以上にする。 ○児童アンケートにおいて、「見通しをもって計画的に家庭学習に取り組むことができた」と答える児童を80%以上にする。	○子どもが疑問をもつ(＝「問い」が生まれる)ような教師の問いかけを工夫し、主体的・対話的な学びを促進する。 【「自律」: 学びへの主体性と粘り強く取り組む力(グリット)を育てる。】 ○高学年の算数科において、適切な単元において、子どもの主体性を育むために子どもが学び方を自己選択する(一斉・個別・学び合い)授業を行う。 【「挑戦」: 自分の特性を考え、主体的に学ぶ力(好奇心)を育てる。】 ○子どもが学習内容・時期を選択・決定できる家庭学習の課し方を実践する。 【「自律」・「挑戦」: 自分で考え(責任感)、主体的に学ぶ力(好奇心)を育てる。】	A	○12月に実施した算数アンケートにおいて『「問い」「問題」が何かをしっかりとらえてから、授業に取り組んでいますか』と「見通しをもって、問題に取り組んでいますか」について、肯定的な回答をした児童は、90%であった。 ○年間3回実施した家学がんばろう週間の取り組みを中心に、主体的な学習をしていくように、指導をしている。家学がんばろう週間後、各クラスから提出された保護者の感想や児童の感想から、進んで学習しようとしている子ども達の姿が見られるようになってきた。また家庭学習にAI教材を高学年で取り入れてから、家庭学習への意欲向上が出てきた。	A	○授業改善に継続的に取り組まれており、子どもたちの学びに向かう姿勢や主体的に考えようとする態度の高まりが感じられる。先生方が協働しながら実践を積み重ねている点は、岩松小の大きな強みであり、高く評価できる。また、AIドリル等を積極的に活用し、基礎・基本の定着を図っている点も効果的な取組である。今後は、基礎的な力の定着を土台としながら、子ども自らが課題を見つけ、主体的に学びを深めていく姿がさらに広がることを期待したい。
	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○児童アンケートにおいて、「楽しく(意欲的に)学校生活を送っている」と答える児童を90%以上にする。 ○児童アンケートにおいて、「自問清掃を頑張っている」と感じる児童を90%以上にする。	○人権教室では、こどもの実態に応じた話や活動を通して、自分や友だちを大切にすることを育み、自己肯定感の向上を図る。 【「挑戦」: 前向きな姿勢や好奇心をもって学校生活に取り組む力を育てる。】 【「尊重」: 多様な価値観や意見を受け入れ、他者を尊重する力(寛容性)を育てる。】 ○自問清掃の取組を通して、自律的に行動する力、他者と協力する姿勢、思いやりの心を育てる。 【「自律」・「尊重」: 公共の場を大切に、感情をコントロールする力(自制心)、責任感をもって行動する力(責任感)、仲間と協働する姿勢(コラボレーション)を育てる。】	A	○後期の人権教室は「民族・平和・真実」のテーマで、計画通りに実施された。1月の平和集会は、実行委員会を中心に、どの学年も平和を願って歌ったり、調べたことを発表したりすることができた。児童アンケートでは「学校で友だちや先生と過ごすのは楽しい」と肯定的に答えたのは94%であった。 ○一生懸命に自問清掃に取り組む児童の姿を写真やコメントで紹介したり、「がまん日記」の中から特に優れた記述を掲示したりするなど、具体的なモデルを示しながら指導を継続してきた。その結果、「自問清掃を頑張っている」と自己評価した児童は95%に達し、本取組の有効性が確認できた。	A	○子どもたちの様子にも温かな関わりが感じられた。遊びの中で自然に声をかけ合い、転びそうな友だちを支えたり、困っている下級生にそっと寄り添ったりする姿が見られる。日頃の人権教育や自問清掃の積み重ねが、こうしたやさしさとして表れていると感じた。安心して過ごせる学校風土が着実に育っている。
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○児童アンケートにおいて、「いじめをなくす宣言を守っている」と答える児童を90%以上にする。 ○保護者アンケートにおいて、「いじめ防止の取組に成果が見られると思う」との問いに、肯定的な評価(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」)を90%以上にする。	○「口月の心」「Q-Uテスト」「教育相談週間」などを活用し、一人ひとりのこどもの実態を把握し、必要に応じた早期対応・支援につなげる。 【「尊重」: 他者の人格や気持ちを大切に(寛容性)、安心・安全な人間関係を築く力(対人関係能力)を育てる。】 ○月1回の生活指導会・教育相談会を通して、こどもの様子を共有し、スクールカウンセラー(SC)やスクールソーシャルワーカー(SSW)などの専門職と連携しながら、共通理解と支援の充実を図る。 【体制を整えることで、こどもの「自律」や「尊重」の力を育み、学校全体でこどものWell-beingを高めることを目指す。】	A	○問題の早期発見と早期解決のため、「口月の心」「Q-Uテスト」「教育相談週間」で、児童の心の状態の把握し、早期解決に努めた。また、月1回の生徒指導会・教育相談会を通して、気になる児童や配慮を要する児童について情報共有を行い、共通理解を図った。SCやSSW、市こども家庭課とも情報共有し、専門職と連携しながら適切な支援につなげている。 ○児童アンケートにおいて、「いじめをなくす約束をも守っている」と肯定的に答えた児童は89%であった。また、「いじめ防止の取り組みに成果が見られる」と答えた保護者は89%であった。	B	○「口月の心」やQ-Uテスト、教育相談週間を通して児童の心の状態を把握し、早期対応に努めている点は高く評価できる。月1回の会議で情報共有を図り、SC・SSW等と連携する体制も整っている。一方で、児童89%、保護者89%と概ね高い結果であるものの、なお1割程度に意識の差が見られる点については、丁寧な対話と積極的な取組が求められる。
● 心の教育	●児童が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	○児童アンケートにおいて、「先生は自分のよいところを認めてくれていると思う」と答えた児童を90%以上にする。 ○児童アンケートにおいて、「将来の夢や目標を持っている」と肯定的に答えた児童を80%以上にする。	○「がまん日記」や帰りの会などを活用して、こどものよいところを認め合う機会を設け、自己肯定感の向上を図る。 【「尊重」: 児童が自己の価値を実感し、他者との信頼関係を築く力(寛容性・対人関係能力)を育てる。】 ○総合的な学習の時間、生活科、社会科、道徳などの教科等を通して、自分の生活を振り返ったり、将来の夢や目標について考えたりする活動を行う。また、学級活動等において、学ぶことの意味や意義について考える話を行い、主体的な学びの姿勢を育てる。 【「挑戦」・「自律」: 将来を見据え、自らの目標に向かってAARサイクルを回す力を育てる。】	A	○各学年の実態に応じて、活動の振り返りや帰りの会などで、児童のよいところを認め合う機会を設け、児童のよいところを認める機会を増やした結果、児童アンケートにおいて、「先生は自分のよいところを認めてくれていると思う」と答えた児童は88%であった。 ○自分の成長を振り返り、将来に繋げられるように、各教科の学習でできるようになったことを振り返る活動や、助産師や薬剤師、弁護士などの地域人材を活用した学習活動を行った。児童アンケートにおいて、「将来の夢やめざしていることがある」と肯定的に答えた児童は83%であった。	A	○帰りの会や振り返りの場面で児童のよさを認め合う取組が継続され、自己肯定感を育てる基盤が着実に築かれている。アンケートで88%の児童が肯定的に回答していることは成果の表れである。また、助産師や薬剤師、弁護士など地域人材との関わりを通して将来を考える機会も保障されている。今後も様々な人との関わりや体験を通して視野を広げ、自分の可能性を高めていく取組の充実を望む。
	○創造的な特別活動の展開 ○集会等の場において、児童に自己選択・自己決定の機会を与える。	○児童アンケートにおいて、「委員会活動や係活動で自分の役割を自覚し、創造的に活動している」と答えた児童の割合を90%以上にする。 ○児童アンケートにおいて、「自分で選び、決めることは、自分の成長につながると感じている」と答えた児童の割合を80%以上にする。	○児童集会、代表委員会、委員会活動、係活動などにおいて、一人ひとりに役割をもたせ、こどもの思いや考えを生かした主体的な活動や自己選択・自己決定できる機会を保障する。 ○こどもが児童会活動等を通じて役割を果たす中で、生活上の諸課題の解決に向けて主体的に関わる力を育成する。 【「自律」: 責任をもって行動する力(責任感)、「挑戦」: 自ら工夫して取り組む意欲(好奇心)や批判的・論理的に思考する力(クリティカルシンキング)の育成を図る。】	A	○児童アンケートにおいて「委員会活動や係活動で自分の役割を自覚し、創造的に活動している」と答えた児童は90%以上であった。一年間を通して、委員会活動では、工夫を凝らした創造的な活動に取り組むことができた。係活動では、学校生活が楽しくなるような係を考え、自ら取り組むことができていた。 ○児童アンケートにおいて「自分で選び、決めることは、自分の成長につながると感じている」と答えた児童は80%以上であった。一年間を通して、児童会や学級での活動を自分たちで考えて決定し、実行していく経験を積み重ねることができていた。	A	○運動会や児童集会を実際に参観し、きらきらと輝く子どもたちの姿が強く印象に残った。実行委員会や高学年児童を中心に、自分たちで考え創り上げようとする主体的な姿勢が随所に見られた。委員会や係活動でも工夫を凝らした取組が進められ、自治的活動が着実に根付いていることがうかがえる。

●健康・体づくり	●「望ましい生活習慣の形成」	○児童アンケートにおいて、「睡眠時間がしっかり確保できている」と答えた児童の割合を80%以上にする。  ○児童アンケートにおいて、「毎朝朝食を食べている」と答えた児童の割合を90%以上にする。	○年2回の「健康アンケート」を実施し、メディアの閲覧時間などの実態を把握したうえで、養護教諭と連携し、睡眠や生活リズムとの関係について適切な指導を行う。 【「自律」:健康的な生活リズムを自ら意識し(自制心)、整えていく力(グリット)の育成を図る。】  ○望ましい生活習慣や食育に関する指導を、学級活動や教科等(家庭科・保健・道徳など)と関連付けて系統的に推進する。家庭における生活習慣チェックを定期的に実施し、集計結果を学校だより等で発信することで、家庭と連携した生活改善を図る。 【「自律」:生活の基盤となる習慣を大切に(自制心・グリット)、自分の体調や学習への準備を整える力(責任感)を育てる。】	A	○児童が自身の生活リズムを振り返ることができるよう、生活リズムの大切さについての保健指導や健康アンケートを実施した。また、家庭での取組に繋がれるように、生活保健部だよりで健康アンケートの結果についてお知らせをした。児童アンケートにおいて、「毎日十分な時間眠れている」と肯定的に答えた児童は88%であった。 ○委員会活動を通じて、朝食は2品以上食べることに呼びかけ、昼の放送で朝ご飯の内容の紹介も行った。児童アンケートにおいて、「毎日朝ご飯を食べている」と肯定的に答えた児童は81%であった。健康アンケートにおいて、「健康に良い食事をしていると思う」と答えた児童は94%であった。	A	○「早寝・早起き・朝ごはん」を柱とした保健指導や健康アンケートの実施により、児童が自らの生活習慣を振り返る機会が確保されている点は評価できる。結果を学校だより等で共有するとともに、委員会活動と運動させた啓発を行っていることも効果的な取組である。睡眠88%、朝食摂取81%と概ね良好な状況が見られるが、朝食内容の質の向上や生活リズムのさらなる安定に向けては、家庭との連携が不可欠である。今後も育友会等と協働しながら、継続的な働きかけを行うことが重要である。
	○運動習慣の改善や定着化	○運動習慣の定着を図ることを目的とし、春季・秋季においては運動実施率80%以上(※高低温多湿時等を除く)にする。 ○健康委員会を中心に「スポーツ週間」を実施し、児童が楽しみながら運動に親しむ機会をつくる。	○昼休み等の時間を活用し、全てのこどもが参加できるイベントを企画・実施することで、スポーツ週間への参加を促す。こどもにとって運動が楽しく、継続しやすいと感じられる環境づくりをめざす。 【「挑戦」:楽しさや達成感を通して、運動に意欲的に取り組む姿勢(好奇心)を育てる。】 【「尊重」:学年や学級を超えた交流を通して、協働する力(コラボレーション)を育む。】	A	○健康委員会では、運動習慣に個人差がある実態を踏まえ、昼休みを活用して全児童が参加しやすい内容を工夫し、11月に「3色鬼ごっこ」を実施した。運動イベントを企画することで、これまで運動に親しむ機会が少なかった児童にも参加のきっかけを広げることができた。今後は、一律の活動だけでなく、児童自らが選択できる種目の多様化を図り、より主体的に運動に関わる機会を充実させていく必要がある。	A	○健康委員会の取組は、児童の実態を踏まえた工夫が見られ、全児童が参加しやすい活動を企画している点が評価できる。昼休みの活用や「3色鬼ごっこ」などの実践により、これまで運動に親しむ機会が少なかった児童にも参加のきっかけが広がっている。今後は、児童自らが選択できる活動の幅をさらに広げること、主体的に運動に関わる機会の一層の充実が望まれる。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	○教職員一人ひとりが「自律」的に健康管理・勤務時間を意識し、教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。  ○年間20日の年次休暇のうち、教職員1人あたり14日以上の取得を目指す。	○毎週金曜日を「ノー残業デー」と定め、職員室内に掲示を行い、職員同士の声かけも含めて意識づけを図る(金曜日放課後には諸会議は設定しない)。職員のWell-beingを高め、持続可能な教育環境を整備する。 【働き方の見直しと休養の確保により、教職員が意欲と活力をもって子どもたちに向き合える環境づくりを進める。】  ○配布物や調査物等のデジタル化、会議の精選や「ゴール(目的・終了時刻)」の明示を徹底し、業務全体の1割削減を目指す。効率化を図りながら、教育活動の質を維持・向上させる。 【教職員一人ひとりが自身の心身の健康を守り、教育活動の質と持続性を高め、こどものWell-beingにもつなげる。】	A	○令和7年度の時間外在校等時間は、全体平均で月約17.7時間と抑制された水準で推移した。ノー残業デーの徹底や業務のデジタル化、会議の精選等の取組により、勤務時間への意識が高まり、計画的な業務遂行が進んだことが成果として表れている。 ○一方で、繁忙期や特定業務への負担集中が課題として明らかになった。今後は業務の平準化と役割分担の見直しを進めるとともに、各自が主体的に定時退勤日を設定するなどタイムマネジメント力の強化を図り、持続可能で安心して働ける職場環境のさらなる充実を目指していく。	A	○先生方が互いに支え合いながら業務の効率化に努め、協働体制の強化が図られている。子どもと向き合う時間を大切にしようとする姿勢は明確であり、業務の精選や役割分担の工夫も進められている。組織として前向きな改善意識が共有され、着実な取組の積み重ねが見られる。
	○学校組織、教職員集団としての働きやすい雰囲気づくり	○「一人で抱え込まず、気軽に情報交換や相談ができる職場だと思う」と回答する教職員の割合を80%以上とする。	○ストレスチェックを行い、各自の心の状態を把握する。  ○職員同士が気軽に話せる時間(金曜日の放課後の時間「ほっとタイム」16:20～16:40)を設定する。 【「尊重」:互いの立場や考えを認め合い、支え合える人間関係の構築をめざす。】	B	○毎週金曜の「ほっとタイム」の継続により、職員室での自然な会話や声かけが増え、心理的安全性の向上が見られた。互いに支え合う温かな雰囲気定着しつつある。  ○日々の対話やストレスチェックを通して、業務を抱え込まない風土づくりが進んだ。一方で、単学級である本校では継続的に支えるメンター的な役割の必要性も感じられた。今後も支え合う文化を大切にしていこう。	A	○毎週金曜の「ほっとタイム」の取組は、教職員同士の自然な対話や声かけを生み、心理的安全性の向上につながっている。4月当初と比べても交流が深まり、互いを尊重し支え合う温かな職場風土が着実に醸成されている点は高く評価できる。日々の対話やストレスチェックを通じて業務を抱え込まない体制づくりも進められている。今後は単学級の特性を踏まえ、継続的に支える役割の工夫も期待される。
●特別支援教育の充実	○特別支援教育体制の強化と充実	○「困り感のある全児童の支援方法を理解し、常に実行している」と回答する教職員の割合を90%以上とする。  ○対象児童に対する個別的教育支援計画・指導計画の作成率・活用率(常に加筆修正する)を100%とする。	○校内教育支援委員会を通して、対象児童への支援体制を検討し、全職員で共通理解を図る。また、校内研修を通じて特別支援教育への理解を深め、支援の質の向上に努める。 【「自律」:教職員一人ひとりが自ら関わりをもち、責任ある対応(責任感)を目指す。】  ○前年度の引き継ぎをもとに、個別的教育支援計画・指導計画を適切に作成・活用しながら、児童一人ひとりに応じた支援を行う。 【「自律」:児童一人ひとりの特性や教育的ニーズを的確に把握し、個別的教育支援計画・指導計画を適切に作成・活用することで、児童の「自律」を支援する。】	A	○教職員アンケートでは、「困り感のある児童一人ひとりに応じた支援方法を理解し、実行できていますか。」「個別的教育支援計画・指導計画を作成し、加筆修正をしながら活用していますか。」の2つの項目とも、100%であった。 ○児童の困り感に基づいて話し合いを行い、必要に応じて子ども支援センターや巡回相談等につなぎ、支援に当たった。 ○個別的教育支援計画・指導計画を作成し、支援に行った。年度末には振り返りを行い、来年度の支援につなげるようにしている。	A	○個別的教育支援計画・指導計画を早期に作成し、継続的に見直しながら支援を行っている点は高く評価できる。校内教育支援委員会やサポート委員会での丁寧な協議、外部専門機関との連携、夏季研修による専門性向上など、組織的な体制が確立されている。教職員アンケートが100%であることから、全教職員で支える意識が共有され、児童理解に基づく支援が着実に進められていることがうかがえる。

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			最終評価		学校関係者評価		
評価項目	重点取組内容	成果指標(数値目標)	具体的取組	達成度(評価)	実施結果	評価 意見や提言	
○読書活動の推進	○主体的な読書活動の推進	○貸出冊数年間150冊以上の児童の割合を80%以上にする。  ○児童アンケートにおいて、「本を読んで、自分の世界が広がったと思う」と回答する児童の割合を80%以上にする。	○読書への興味を高める環境整備(図書館だよりや図書室前の掲示等で本の紹介、3冊貸し出し等)を行う。  ○図書委員会の活動の一つとして、ピブリオバトルを実施する。 【「挑戦」:未知のものに対する探究心や興味をもち、積極的に学ぶ力(好奇心)を育てる。】	A	○児童アンケートで「本を読んで自分の世界が広がったと思う」が約74%であった。目標の80%に届かなかったが、貸出冊数年間150冊以上の児童の割合が80%を超え、充実した読書活動ができた。 ○図書館前の掲示物では全児童参加で構成したり、図書委員が描いた分類番号や干支の絵を飾ったりして興味を引きつけた。 ○初めてのピブリオバトルだったが、体育館での本選にはたくさん児童が参加してくれた。また、発表された本に興味をもち借りたい児童であふれた。	A	○読書時間の確保や読書環境の整備に加え、ほたるまつりやピブリオバトルなどの取組を通して、子どもたちが本に親しむ姿が着実に広がっている。発表された本を借りようと集まる様子からも読書への関心の高まりが感じられ、年間150冊以上読む児童が80%を超えている点は大いに評価できる。 今後は、こうした取組をさらに充実させるため、家庭における読書時間の確保や読み聞かせ、読書について語り合う機会づくりなど、保護者の皆様の積極的なご理解とご協力をお願いしたい。
◎ふるさと学習の充実	○ふるさと小城(岩松)の歴史や文化を学ぶことで、その良さに気づき、未来の小城について考えさせる教育活動の推進。	○児童アンケートにおいて、「ふるさと小城の良いところを自信をもって話すことができる」と回答した児童の割合を90%以上にする。	○春に全学年で校区内の散策と地域清掃活動を実施し、ふるさとへの関心と愛着を育てる。  ○学年の発達段階に応じた体験活動や、「岩松読本」を活用した調べ学習を通して、地域の歴史や文化への理解を深める。  ○5・6年生を対象に「岩松検定」を実施し、学びを振り返りながら、地域に関する知識の定着と意欲向上を図る。 【「尊重」:ふるさとの文化や人々、自然を大切に思う心を育てる。】	A	○「ふるさと小城の良いところを自信をもって話すことができる」と回答した児童の割合は、約80%であった。目標の90%に届かなかったが、4年生の小城町探訪や中島羊羹さんとの羊羹づくり、5年生のほたるの学習、6年生のふるさと史跡探訪など体験的に地元について学ぶ機会を設けることができた。さらに、4年生では、江里山蕎麦の会さんとのそば打ち体験を数年ぶりに体験したり、「岩松検定」の実施を昨年までの「5・6年生対象」から「4～6年生対象」に拡大するなど、地域学習の場面の創造を行っている。地域の協力を得ながら、ふるさとの宝物に触れさせる機会を、これからも大切にしていきたい。	A	○校区清掃や町探訪、ホテル学習、羊羹づくり、そば打ち体験など、地域資源を生かした学習が計画的に実施されており、子どもたちがふるさとに親しみをもって学んでいる様子がうかがえる。地域の方々と直接関わる体験活動が充実している点は本校の特色であり、高く評価できる。また、保護者の行事参加や見守り等の協力も、学習を支える基盤となっている。 ○「ふるさとのよさを自信をもって話せる」と回答した児童が約80%であることは成果の表れといえる。今後は体験活動を継続するとともに、家庭での対話や振り返りを通して、学校・家庭・地域が一体となった取組のさらなる充実を期待したい。

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志と誇りを高める教育

5 総合評価・次年度への展望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問いを基調とした授業づくりとAIDルル等の活用により、主体的で深まりのある学びの推進が図られた。今後は、問いの質の向上と個別最適な学びのさらなる充実が期待される。</li> <li>・早期把握・早期支援の体制に一部課題が見られることから、情報共有の徹底と役割の明確化を図り、チームによる組織的対応を強化して安心して学べる環境づくりを充実させる。</li> <li>・系統的なカリキュラムの基、異学年合同学習を取り入れながら、主体的・探究的な学びを発展させ、その成果を各教科等へ生かす。</li> </ul>
----------------	---